

■ヒンデミット／弦楽と金管のための協奏音楽 Op.50

パウル・ヒンデミット（1895-1963）は20世紀のドイツを代表する作曲家の一人。1920年代に「新即物主義の作曲家」としてアマチュアでも参加できる実用音楽を書く一方、前衛の技法を用いた時事オペラといったジャンルで一躍、時代の寵児となったが、30年代に入るとモダニズムから離れ、1937年には著作『作曲の手引』を出版して、秩序ある和声や形式の構築を志向した。

「弦楽と金管のための演奏会用音楽」は1930年、ボストン交響楽団の創立50周年記念のシーズンのために、S.クーセヴィツキの委嘱で作曲された。木管楽器と打楽器を含まず、弦合奏も第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンの区別がない。2つの部分から構成されているが、4楽章形式の内容を圧縮したとも解釈できる。第1部の「中庸の速さで、力をもって」はトランペットとトロンボーンによる主題で始まる。力強いマーチのように進んでいき、コラール風の楽想を挟みながら展開されたのち、「たいへん幅広く、しかし常に流れるように」と記された部分に入り、弦楽器が抒情的なメロディを歌う。第2部は三部形式で、冒頭は「生き生きと」と題された3声のフーガがきびきびと奏でられ、やがて爽快なフレーズとなる。「緩やかに」と記された中間部は緩徐楽章のよう。情感たっぷりの主題が連綿と続く。「最初のテンポで」に入ると、冒頭のフーガが発展的に再現され、楽器の技巧を凝らした展開となる。

白石美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、弦五部